
らじお ♪ とーく

LEOPARD

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らじおとーく

【Nコード】

N7383V

【作者名】

LEOPARD

【あらすじ】

幻想学園高等部『らじお部』そこは超能力者、魔術師、忍者、獣人、宇宙人、アンドロイド、妖怪が集まる変人集団の部活だった。そんな中で常識人の鳴沢秀人が過ごす学園コメディ。

本番開始五秒前

私立幻想学園高等部、北校舎一階放送室。

そこに僕、なるさわひでと鳴沢秀人はいるのだが、

「ねえルージュ、暇だからあれ見せてよ。」

「嫌ですわ、触覚のあれは特別な人にしか見せません。」

「ケチー。」

「にゃーにゃー、忍_ゝ腹へったー。」

「……これ。」

「にゃっ！ 鯉節！！ ありがと忍_ゝ。」

「おい奏、今日こそは決着つけるぞ。」

「仕方があるまい、まあ何回やっても結果は変わらないと思うがな。
ハッハッハー（棒）。」

「言ったわね！！ 吠え面かせてやる。」

「二人とも程々にね。……この組み合わせはなかなかね。」

目の前では、超高性能次世代型アンドロイドとシンク星人の王女が
会話を交わし、猫型獣人が忍者の末裔に餌付けされて、超能力者と
魔術師がお互いの技をぶつけ合い、それを妖怪女がなだめている。

どうしてこうなった。

そんなことを僕は考えていた。

読者の皆さんにはまずなぜ僕がこんな所にいるのか、ということから説明しよう。

事の始まりは今年の5月のゴールデンウィーク明け初日にまで遡る。僕はこの中途半端な時期に親の諸事情でこの私立幻想学園に転校してきた。

さすがに連休明けだけあって、僕が自己紹介を手短に済ますとクラスメートからの質問攻めにあうこともなく、そのまま放課後まで過ぎた。

そして放課後、僕は職員室に呼び出されて担任に、クラスは慣れたか？などと聞かれた。

僕はそれに適当に対応をしていた。が、その後の言葉がいけなかった。

部活は何に入るの？

僕は中学の時も幽霊部員として在籍していただけで、前の高校1ヶ月間は帰宅部だったから、特に何部に入りたいとかはなかったのだ。しかし、どうせならこの機会に、高校生活を充実させて、青春を謳歌するためにちゃんと部活をやってみようと思ったのだ。

なので僕はたまたま目にとまった『らじお部』に入ることにしたのだ。

翌日、僕は『らじお部』の部室の放送室を訪ねた。

すると、部長と思われる人が満面の笑顔で迎えてくれた。

「よく来てくれたわね。さて、じゃあまず『らじお部』の活動内容から説明するわ。奏！！」

そうして、奏と呼ばれた人が手に三本ほど巻物（？）らしきものを抱えてきた。

「じゃあまず、『らじお部』の、ら。」

そう言うと、巻物の一つが開かれた。
そこにかかれていたのは、

「楽に楽しく!!」

よくわからないが、そういうことらしい。

「そして二つ目、『らじお部』の、じ。」

二つ目は、

「自由奔放に!!」

楽に楽しく自由奔放になにをやるんだ？

そんなことを考えている間にすでに三つ目の巻物は開かれていた。
そこにはでかかと、

「己がしたいことをしながらサボる。」

「今なんと？」

思わず僕は部長と思われる人に訊ねていた。

「全く、聞いてなかったのか？だから、楽に楽しく自由奔放に己が
したいことをしながらサボる部活略して『らじお部』だよ。」

「……何ですと？」

「要は隠れ蓑よ。ウチの学校、部活強制じゃん？だから、部活をや

りたくない連中の集まり。帰宅部とあんまり変わんないよ。」

「あんまりだああああ！！！！！！！！」

僕は衝撃の事実に見え驚愕していた。

「退部を懇願する！！！！」

そして真つ先に退部を宣言した。

「無理、部長の許可がないとね。あ、ちなみに部長はあたしで、許可は出さないぞ」

部長らしき人、というか部長は残酷な事実を、可愛らしく、俺に突きつけてくれた。

「さらば、俺の青春！！」

俺はその場に崩れ落ちた。

その後1ヶ月間いろいろありながら今に至る。

この暗黒の1ヶ月（秀人命名）のことはまた後日語るとしよう。

ともかく、僕はこのどうしようもない部活に入ってしまったのだ。

この物語は、僕、鳴沢秀人がそんなどうしようもない部活の日常を描いた物である。

放送第一回目：変人の集い

まずは読者の皆さんに『らじお部』のメンバーを紹介しよう。
まず一人目、三年B組所属、部長の腐川吹雪先輩、部活では愛称でぶつきー先輩と呼ばれている。

この人は、妖怪雪女である。

まあ今までの流れからしてあまり驚かないのだろうが、一応説明しないと僕の命が保証されないので説明しておく。
では、説明しよう。

腐川吹雪は、古くから言い伝えられている、妖怪雪女なのだ。
さらに言うならば、彼女は腐女子なのだ。

BL本が好きなのだ。

乙女ゲームが大好きなのだ。
なよなよした男子が大好物なのだ。

「うるさい、黙れ、腐女子でなにが悪い、氷漬けにされたいのか？
ドカス。」

「すみません。」

追記

超DSなのだ。

後輩に冷たいのだ。

「よっぽど氷漬けが良いらしいな。（ニコニコ）」

「……（汗）。すみませんでした。」

つ、次いこうかな。

決して僕の体がもたないからとかじゃないし、土下座したまま氷漬
けにされかけたからとかじゃないからね。

続いて二人目は、三年E組所属、副部長の星井・ルージュ・美姫先ほしい・るーじゅ・みき
輩だ。

彼女は宇宙人である。

場所は地球から遙か遠くの（何光年かは忘れた）シンク星と言うと
ころから、地球観光に来た王女様らしい。

触覚もあるし、地球人とは姿形も違うらしいが、地球よりも技術は
進歩してるらしく、今は頭の先から足の先まで、地球人そのものだ
でも、触覚は隠しきれないらしく、髪が二本目立ってアホ毛になっ
ている。

「アホ毛って言うんじゃないやありませんの！！」

「みぎや！？」

アホ毛の先端からは光線がでる。通称アホ毛ビーム（秀人命名）。

「パワー全開ですわ！！！」

「グバアAmjgadmナタミ！！」

「次言ったら、地球ごと焼き払いますわよ。」

地球が減じる前に僕の体が消し飛びそうなので次に行きます。

三人目は、三年D組所属安藤ろいど（あんどろいど）先輩。

彼女は超高性能次世代型アンドロイドである。

ロボット三原則とやらを完全に無視してる自立型ロボットらしい。

「違うよ鳴沢、正確には、近未来対応超高性能次世代型戦闘用アン

ドroid試作品No.001だよ。」

「はい？」

「だから、近未来対応型超高性能次世代型戦闘用アンドroid試作品No.001だよ。」

「戦闘用？」

「うん、戦闘用。」

追記

衝撃の事実！！

どうやら殺戮兵器らしい。

今まで僕は殺戮兵器の隣で平凡に過ごしていたらしい。

「なんなら試してみるか。」

「いや、いいです。部室潰れますから。」

「遠慮するなよ。ほらほら行くぞ。」

「先輩、止めましょう。止めなさい。ヤメテクダサイ、オネガイシマス（汗）」

「喰らえ、レーザーキャノン！！！」

「俺の意志は関係なしか！！！」

さて、僕のサンドバックキャラが定着してきたところで、次行きま

しょうか。

四人目は、猫山^{ねこやまひとみ}人美先輩。

この人は獣人だ。

本人曰く、猫型らしい。

この人はとにかく人懐っこい。

すぐにじゃれついてくるのだが、

「にやるさわ、遊ぼうぜ。」

「いいですけど、なにするんですか？」

「うんとね、喧嘩。」

「お断りします!!」

「じゃあいくよ。猫島流獣人武術殺法、山猫拳!!!!」

「いや殺しちゃだめでグシャボロオwjjtww!!」

ちなみに、獣人のなかでは有名な武術の頭首らしい。

ああ走馬灯が見える。

読者の皆さんどうやら僕はここまでのようです。さようなら。

「……大丈夫。」

ああ女神が僕を呼んでいる。

「……女神じゃない。」

「忍先輩。」

僕に手を差し伸べてくれた女神、この御方が五人目の部員、みのさわしのぶ 養澤忍先輩だ。

彼女は忍者の末裔である。

「……今、秘薬飲ましてあげるから。」

「ありがとうございます。」

そう、とても優しく、部員のなかで最もまともだし、

「……口開けて。」

「あつ、はい。」

僕を今も看護してくれているのだが、

「……（ゴソゴソ）」

「しえんはい、しょこはひやなのあにやでひゅ。（訳：先輩、そこは鼻の穴です。）」

残念なことに、猛烈に不器用なのだ。

たまに、クナイとか手裏剣とかが顔をかすめる。本人に、悪気がないのだからなおさらたちが悪い。

「……ごめんなさい（笑）」

前言撤回、悪意があったりするかもしれない。

「あんだ達なにやってんの？」

今、僕と忍先輩の愛の巣（？）に口を挟んできたのが、六人目の部員、紫藤麻子先輩だ。

「紫藤先輩、今日も小さいですね、背とか胸とか。」

「うつさい！！サンダーボルト！！！！」

「ジイイザアアアス！！」

彼女は魔術師である。

胸は永年AAAカップ、身長は万年130？。
だけど態度だけはいつちよ前に一人前の先輩だ。

「AAA言つな！あと身長は131？だ！」

「すいません、僕としたことが、正確にはAAAAでしたね。」

「死いいいいええええ！！！！！！！！」

「アンブウイリイイバオオオオ！！！！！！！！」

そろそろ内蔵が口から飛び出してもおかしくないんじゃないか。

「貴様ついにマゾとやらに目覚めたのか。」

今、僕を変態を見る目をして睨んでいるのが、最後七人目の部員、
諫早奏先輩だ。

「違いますよ。第一先輩、正確には masochist ですよ。英語できないんですね（笑）」

「ほう、よほど死にたいらしいな。どうやって死にたいんだ。絞殺か、絞殺がいいんだな、わかった。」

「ちよつ待つて、誰か助けて。」

周りに助けを求めると、さつきまで近くにいた忍先輩や麻子先輩が離れている。

「うん、うん、うん……」

「奏、あんたは気にいらないけど、今日の所は譲ってあげるわ。」

「だとさ秀人。」

そう言う、どこから引っ張り出したのか、ロープが秀人を襲った。彼女は超能力者だ。

念力とか、その他諸々の力が使えるらしい。

「ノオオオオオオ!!!」

意識が途切れる前に一言、何度も言うがこの物語は常識人の僕がこの変態チックな先輩達と過ごす青春学園ストーリーである。

最後に一言、

「キツモチイイ！！！！！！！！！！もつと縛ってえええ！！！！！！！！！！」

「「「「「てめえが一番変態だああ!!!!!!!!」」」」」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7383v/>

らじおゝとーく

2011年10月8日04時34分発行